

Common Sense Press

vol.001

May.2014

【contents】

- ・ from the editor 1
- ・ フン大使川上村訪問記 3
- ・ 藤原忠彦村長インタビュー 5
- ・ ベトナムでもレタス栽培 7
- ・ バー・モウさん、帰国！ 8

【from the editor】

ドアン・スアン・フン駐日ベトナム大使を、長野県川上村にご案内した。朝早く東京を出発してお昼前に到着。視察して昼食をとって、すぐにまた視察。夕方には東京に到着するという弾丸ツアーだったが、これはベトナム本国からチュオン・タン・サン国家主席が国賓として来日する直前で、フン大使は激務の中をぬってでも川上村を見学したい、というリクエストゆえのことだった。逆にいうとフン大使が、それほど川上村という自治体に魅力を感じているからのことだ。

川上村は、人口およそ4,200人。農業が主たる産業になるが、この農業における村全体の売上高は昨年で159.2億円、農家一戸あたりでは2,500万円から3,000万円、諸経費を差し引いても700万円から800万円程度の収入がある（数値は2011年度）。

高度1,200メートルの地点にある川上村は、年間平均気温7.8℃、冬場の最低気温はマイナス25℃、降霜しない時期は7月と8月だけしかない。1年のうち半分は雪と寒さに閉ざされて何もできない。つまり半年しか働けないけれども、159億円という売上げを農業だけでたたき出すというのが、川上村だ。

ただし、ここまでくるには20数年におよぶ苦悩と苦闘、ひたむきな努力があった。村長の藤原忠彦さんは在職7期。今年で村長25年目に入っている。しかも今年から全国町村会の会長も3期目になるというから、全国の町

村長からそうとう信頼されているということだろう。

有名な『千曲川のスケッチ』（島崎藤村）に、川上村はこう描写されている。

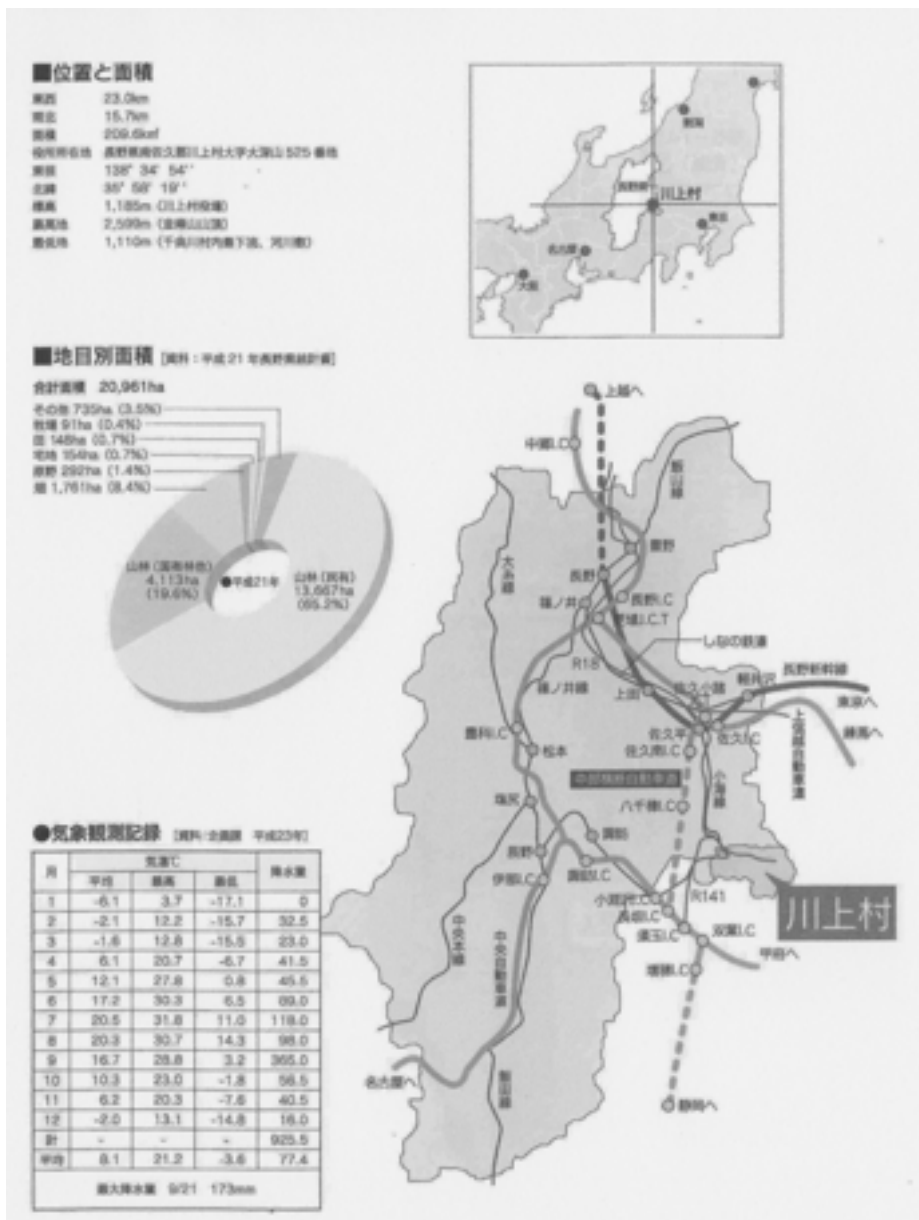
「ここから更に千曲川の上流に当って、川上の八ヶ村といふがある。その辺りは信州の中でも最も不便な、白米は唯病人に頂かせるほどの、貧しい、荒れた山奥の一つであるといふ」

つまり、明治維新のころには「こんな荒れた貧しい山奥があるのかと言われるぐらいの場所だ」と書いているぐらい極貧の村だった。それが、夏にレタスがつかれないかと、終戦当時日本に進駐したアメリカ軍から依頼を受けた。レタスは涼しいところでできるので、夏はなかなか日本ではとれなかった。

川上村はレタスをつくったことはなかったが、一日の温度差、季節的な温度差を利用して、村一丸となって夏のレタスづくりに取り組んだ。今や、夏のレタスだけではなく白菜やキャベツなどの葉物野菜を中心に159億円。村全体がフォロワーシップを発揮して、若い人たちもどんどん育って行って、村が一つの事業体ようになってきている。

さらに、この川上村がすごいのは、経済のみでは人は幸福にはなれない、と言い切っていることだ。こんな村でも金儲けはできる、しかしそれだけでは幸せではない、と。農業立村から精神立村へと舵を大きく切って、総合満足度の高い村を目指した。「村は屋根のない病院」をスローガンにした。1992年のことだった。

すでに21年も前に保健、医療、福祉、介護を一元化する「ヘルシーパーク構想」を樹立して、平地より条件不利な川上村の住民のための幸せ獲得にまい進する。ひとつの建物の中に、村役場の保健福祉課があり、社会福祉協議会があり、トレーングジム、鍼灸施術所、入浴施設、レストラン、診療所、デイサービスがあるばかりか、敷地内に保育園、消防署、交番、あるいは果樹園や遊歩道、見晴台まである。村の医療と福祉を担う部署とスタッフが集中しているだけではなく、そのスタッ



いが、そうではない。多くの過疎地、あるいは小さな自治体が消滅の危機を抱えている最大の理由は、人口の自然減ではなく、若い世代の流出である。川上村は、若い世代が村に定着する率が高い上に、村が積極的に婚活をし、都会からこの村に嫁に来る女性が急増しているからでもある。高収入、半年しか働かなくていい、医療は充実している、映画が見られる映写室があり、24時間オープン図書館があり、これなら高学歴の女性がどんどん村を目指してやってきて不思議ではない。ただし、藤原村長は現状で満足していない。村の中では人材育成、村の外では農業の可能性を広げようとしている。

私が川上村に注目しているのは、以上のようなこれまでの村長のガバナ

フたちは毎日連絡会議を行って情報を共有し、村人たちの健康状態をマネジメントしている。

この20年で、ヘルシーパークがどんな成果を出したか。ひとつだけ例を挙げると、自宅看取り率というのがある。全国平均で自宅で亡くなる割合は12.8%だ。これは厚生労働省が14年前の2000年の数値（しかないそう）から推測したものだ。

では、川上村はどのくらいかという、40%以上。昨年度は48%になるだろうと聞いた。それだけ地域医療、福祉や介護が整えられているばかりではなく、3世代同居が多いためでもある。3世代同居は、それだけ大きな住宅を作る土地があるからだろうと思うかもしれな

ンス、役場職員のフォロワーシップによって、「自治」として日本の中で最も進んでいるからだ。なにより、農業という生業（なりわい）を中心にして自治体の経営が行われている。その経済的な自立をもとにして、いわゆる24時間包括ケアがなされている。民間に任せるのがいいとか悪いとか、自治体がすべて取り仕切るのが当然だとか、そうではないとかの次元を超えて、あらゆる資源を動員して、目的に向かってみんなが力を出し合っている。ここに日本の将来あるべき姿を見て取れるからであり、ベトナムのフン大使も同じように感じているからこそ、川上村に足を伸ばしたのだろう。 ■

【フン大使川上村訪問記】

東京からクルマでおよそ3時間、川上村に到着。ベトナムのドアン・スアン・フン大使と仙谷由人一行は、多くの職員によって大歓迎を受けた。

まずは、村役場の特別会議室で会談。何度も川上村に訪れている仙谷は、川上村とベトナムとが提携しあう重要性を語った。

「私がベトナムに興味をもったのは、国家戦略担当相のとき。知人たちの案内でベトナムに行ったのが最初だ。人口、平均年齢、国土の豊かさ、気候風土、どれをとっても日本型の農業を取り入れれば、大きく発展する可能性をみてとれた。そしてそのためには、川上村のようなコミュニティを作る必要も感じた」

「フン大使も、日本の農業、川上村メソッドを学びたいとおっしゃってた。ならば百聞は一見に如かず、川上村の様子を見れば他と違うことは一目瞭然、だから川上村に行きましよう、ということをして1年前にお話をしていた。それがようやく実現した。喜ばしい限りだ」

これを受けて、川上村の藤原忠彦村長が挨拶。

「大使の訪問を心から歓迎する。川上村とベトナムとの関係も、想像したより早く実現し、改めて感謝申し上げます。川上村は純粋な農村で、他の産業はない。他の地域が抱えているような農村問題は同じく深刻ではあるが、違うところは、後継者がしっかりと定着していることということだ。生産量も安定的に増加傾向で推移している。国内でも珍しい地域になってきた」

「農業のみならず、医療、福祉、教育も大きな柱として村の運営をやってきた。その成功事例として、全国から注目されつつある。その実際を、大使の目できちんと見ていただければと思う」

「農業が医療、福祉に支えられているとすれば、そちらの方面でも交流出来たらと思って。それがたとえ小さな自治体レベルであっても交流していきたいし、やるのなら双方利益がある交流にしていきたい。今日大使と会っ

て、大使は農業問題に関心を持ってくださっていることに感動した。まずは農業でしっかりと手をつないでいきたい」

最後は、フン大使。

「日本は重要なパートナーだ。日本の経験を学びたいし、それには支援もいただきたい。川上村のような日本の地域にまで貢献できるようになると、われわれの果たすべき役割はますます重要になってくる」

「今後の発展のため、特に農業を中心として関係を強化したい。ベトナムは6300万人が農業に従事し、国民の7割が農村部に住んでいる。第一次産業に依存している。日本からの支援があれば、さらに発展していくだろう」

昼食をはさんで、川上中学校の視察。農業に劣らず力を入れているのが教育、人材育成だけあって、川上中学校は施設もユニークで充実しているし、授業の行い方も黒板を背にして先生が立ち、生徒たちは先生と相対して授業を受ける。ステレオタイプで一方向的な授業風景ではなく、コの字型に机を並べ、教員と生徒たちが対話をしながら進める授業を、大使は熱心に見入っていた。

また、校舎は川上村産の唐松（天然唐松を含む）をふんだんに使い外装、内装ともに木の温もりのあるしつらえとなっている。

建築材としてだけではなく、唐松は生徒の机と椅子、教員の机、図書室の閲覧テーブル、ランチルーム（残念ながら給食を食べているところは見ることができなかったが、残り香



がなんとも微笑ましかった) のテーブルなどにも利用されている。

来年(2015年)、確実にこの川上中学校が全国に注目されることになる。なぜなら、15年6月にロシアのソユーズ宇宙船に乗って宇宙に飛び立つ、日本人として10人目の宇宙飛行士、油井亀美也さんの出身校でもあるからだ。

そして最後に、ヘルシーパークの訪問となった。「村は屋根のない病院」を目指し、自宅ケアとデイサービス、医療と保健を複合的に行なう中心的役割を担うヘルシーパークには、診療室はもちろん、大きなお風呂(ヘルシーの湯)もトレーニングジムも鍼灸施術所も、レストランまでもある。

箱物をつくっても運用ができずに錆びれるがまま、という自治体は多いが、川上村のヘルシーパークはその真逆。高齢者だけでなく、妊産婦や乳幼児たちの利用も多いし(2013年度は16人も子どもが生まれている)、若い人たちの利用もある。それだけに、常に設備はバージョンアップしながら維持運営されているのだ。 ■



=====

「ヘルシーパーク構想」20年の成果

- 基本理念：一人の住民(患者、利用者)をヘルシーパーク全員で支える。
- 連絡会議の開催：医者、看護師、介護員、ヘルパー、保健師、ケアマネ、包括支援職員が、利用者の情報を共有する会議を毎日夕方開催している。
- 健康老人率が85.1%(前期高齢者は95.7%)
：高齢者のうち介護認定されていない率のこと(高齢化率は28.7%)
- 高齢者就業率が47.6%(農業センサス)
- 国民健康保険一人あたり医療費170,731円(2012年)
- 死亡者の内訳(2013年4月1日から11月5日)
 - ・全死亡者：25名
 - うち特養等入居者：2名
 - ・自宅で死亡した者：11名
 - うち訪問看護がかかわった者：8名
 - ・病院で死亡した者：12名



【川上村 藤原忠彦村長インタビュー】

川上村は「平均年収2500万円の村」として知られていますが、所得の増大を目標に村づくりをしてきたわけではありません。私の考える村づくりの基本は「人づくり」です。川上村については、外部の方から「レタス産業で収入があるから、後継者がいる」と言われることがあります。しかし、これは間違っています。「人がいたから、産業が育った」のです。

村長に就任した1988年、村はすでにレタス王国として知られていました。ところが、後発の新興産地の追い上げもあり、産地間の競争が激しさを増していました。そこで私は、政策の中心を農業振興から人づくりに徐々にシフトしていきました。

こういう政策が必要だと考えたのは、レタスは天候や市場の動向で価格が激しく上下する相場産業だからです。人間の物質的な欲望には上限がありません。ある年に所得が上がったとき、それと同時に物欲も増やしてしまうと、所得が減ったときに物欲が抑制できなくなります。こうなると、村民同士でいがみあいや争いごとがおき、悪い意味での「競争」がはじまります。これを避けるには、「今の所得で満足だ」という感情を持ち続けることができる、精神的に豊かな人間を育てる教育が重要なのです。



人づくりには、教育だけではなく、生活・文化のインフラも不可欠です。村のすべての世帯に下水道を整備し、95年に完成した多目的文化ホールは最大500人まで収容可能で、日本初の24時間開館の図書館も建設しました。

文化センターの建設には、約20億円かかりました。農水省からの補助金や村の財源を組み合わせる資金を捻出しましたが、当然、村内には「文化施設より農業の基盤整備にお金を使うべき」という意見もありました。それでも私は「基盤整備は後でもできる。しかし、人づくりは今やらなければならない」と説得しました。レタス栽培は、春から夏にかけての約半年間で生産し、残りの期間は休みのため、今では、文化センターは農閑期の村の重要な教育や交流の場としての役割を果たしています。

つまるところ、都会で必要とされる教育と、川上村で必要とされる教育は違うのです。もちろん、国のカリキュラムによる教育も大切ですが、村は独自の教育方針を持って人を育てていかなければなりません。

村の教育とは「知恵の伝承」で、地域の文化や伝統、風習などを伝えることです。これを私は教育の「教」を「郷」に置き換えて、「ふるさと郷育」と呼んでいます。

人間、誰でもよそのものが良く見えるもので、自分の村に素晴らしい資源があっても、それを見逃してしまうものです。たとえば、住宅建設では他県の名の通っているスギやヒノキを使いたくなる。ところが、川上村には高冷地にあるためスギやヒノキは育ちませんが、先人たちが苦労して植林したカラマツという木材があります。これこそが地域の大切な資源で、川上村では、中学校の改築にあたりカラマツを最大限使用した木造校舎にしました。風土が作り出した資源ですから、これらをしっかりと学んで活用する。そうすることで、先人の暮らしや歴史も学ぶことができるのです。

そのほかにも、村営バスの整備、高齢者が健康に暮らせるための医療、介護の機能の充実などを推進してきました。また、都市との

交流も積極的に行っていて、東京都では町田市、三鷹市、武蔵野市、埼玉県では蕨市が休暇施設を作っています。海外では、最近ベトナムの高原の町ダラットのレタス栽培を共同で行なっています。これらも、観光や輸出による収入を目的に実施しているではありません。それよりも、村民がいるんな人と交流することで新しい学びを得て、国際感覚も身につけることができるのが大きいのです。

最近では、人口の減少が日本の大きな課題として取り上げられることが多くなりました。そういう時代だからこそ、人間が人間に投資することが大切です。たとえ人口が減ったとしても、一人あたりの幸せが増え、結果として村全体の幸せの総量が増えれば「人口が減ってもよかった」となります。そして、そういう村が残っていれば、若い人も村に戻ってくるのではないのでしょうか。

自治体の規模を大きくして行政機関を統合してスリム化すれば、すべてがよくなると考えることは間違いです。これからの時代の地

方を生きるには、その土地が持っている「知恵」や「絆」を大切にしなければなりません。それは、川上村のように人口約4700人の小さな村だからこそできることです。今後の地方自治体行政を考えるには、規模拡大による「スケール・メリット」よりも、住民の要請に迅速かつ効果的に対応できる「スモール・メリット」を評価する視点が大切です。

そういう視点をしっかり持つことができれば、川上村が実現してきたロマンは、日本全国の市町村でも実践できるはずですよ。 ■

藤原忠彦（ふじわら ただひこ） 1938年長野県川上村生まれ。1998年、無投票で初当選して以来、7期連続で村長を務める。農業振興、教育・子育て支援および村内の恵まれた自然環境を守ることを重要施策とし、村の発展に努めている。全国町村会会長。



【ベトナムでもレタス栽培】

川上村は、ベトナムのダラット市でもレタスを栽培している。

ダラットの標高は1500メートル。1300メートルの川上村と同じく、朝は朝露を浴び、日中は太陽の強い日差しを浴びる。この朝と昼間の温度差が、美味しいレタスを育む条件になる。

さらに、低農薬有機栽培という日本流の作り方が、食料品の安心・安全性に対する関心が高まっているベトナムで高い評価を受けている。

また、早朝5時半には刈り取り、その後すぐに真空冷却をし、冷蔵車でダラット市内やホーチミンに運ぶ。レタスはイオンなど日本資本のスーパーに卸されるので、ダラットでの収穫、集荷、出荷からホーチミンのお客さんが手に取るまで「冷えたまま」。川上村メソッドで作られた新鮮そのもののレタスは、現地にいる日本人たち、あるいは地元の消費者にとってなくてはならない食料品になりつつある。

ダラットでのレタス栽培は2013年、川上村の農事法人が現地に滞在し、土壌の改良から始めた。そして今年の1月中旬には試験栽培を開始し、今はまだ0.5ヘクタールの畑でのレタスづくりでしかないが、今年中には4ヘクタール、そして将来的には100ヘクタールの大規模操業を目指している。

ダラットは「ベトナムの軽井沢」といわれている避暑地であり、もともと野菜生産も盛んな高原地帯で、そこに川上村と現地の法人、コンサル会社の3社による合弁会社が設立され、川上村・ダラットレタスプロジェクトを運営している。ダラット市政府は、野菜作りが一層さかんになることだけではなく、日本の農業技術がダラットの農業に良い影響を与え、お互いの信頼関係が築かれることも期待している。

一方川上村は、現段階ではダラットでの栽培技術は未熟であるものの、川上村メソッドが定着し品質が向上すれば、将来は大きなマーケットを創り出せると計算している。ただし、道路、物流システムの整備などの課題もあるようだ。 ■



ダラットでのレタス栽培を視察する川上村の川上芳夫副村長（2014.2）

p2,6の図版は「2012 数字で見る川上村」より

【バー・モウさん、帰国！】

4月9日、東京事務所からバー・モウさんの肖像画（陶板）が運びだされた。ミャンマーに待つ孫娘さんに手渡される。

バー・モウさんは1937年、イギリス領ビルマ時代に総理大臣になった。その後、太平洋戦争中にアウン・サン将軍らがビルマ国の独立を勝ち取ると、国家元首に就任。1943年11月に東京で開かれた大東亜会議にもビルマ代表として参加した。ミャンマー人の民族自立の立役者だった。

仙谷由人は民主党政権当時の2012年2月、民主化が進むミャンマーの経済支援のためにヤンゴンなどを訪問。何度か行き来をするうちに、バー・モウさんの孫娘であるユザ・モウ・ハトゥーンさんと知り合い、バー・モウさんの肖像画が東京国立近代美術館にあることを知らされた（無期限貸与品）。

肖像画はタイトル「バー・モウビルマ国家代表」、徳島出身の洋画家伊原宇三郎さんの作品（1943年）。116×89.8の油絵で、ミャンマーの民族衣装を身にまとい、日本から贈られた勲章を胸につけ、眼光鋭く椅子に座っ



ている。これを、大塚オーミ陶業が原寸大で陶板にした。

仙谷はユザさんに寄贈を申し出ると、「誇りにしている祖父の絵を永遠に残る陶板にしてくれてうれしい」

と喜んだ。その約束を果たすために、9日の肖像画旅立ちとなった。

2月14日、仙谷は講演のために新潟県長岡を訪れた。「地域再生は自治にあり」という主題の講演が終わり、主催者の栃尾商工会議所のみなさんとの懇親も深めて長岡に宿泊。関東では記録的な大雪となった翌日、長岡では普通の冬の風景だったが、除雪に慣れてない関東の交通網がすべてストップ。新幹線は終日運休、高速道路も通行止めになって、仙谷はその日1日長岡に足止めされることになった。

だが、これが仙谷とバー・モウさんとの結びつきを強めた。

地元の知人の案内で、南魚沼市にある薬照寺を訪れることになった（旧南魚沼郡塩沢町）。ここは、戦後の一時期、バー・モウさんがビルマから日本へ亡命してきて身を寄せた寺だった（1945年8～12月）。バー・モウさんはここで英語を教えながら日本語も習得し、塩沢町、湯沢町がいたく気に入って、後に生まれた孫娘に「ユザ」と名づけたといわれている。

「実は、薬照寺にはずっと訪れたいと思っていたけれども、なかなかその機会がなかった。もし大雪が降って長岡に足止めされなければ、と思うと、これはバー・モウさんのお導きかもしれないなあ」

と仙谷はしみじみと語る。

バー・モウさんの肖像画の帰国前に、ゆかりの地を訪れ、寺に残されたいろいろな資料も目にし、和尚様からお話を伺うことができた。バー・モウさん本人の亡命、帰国からまもなく70年になる。 ■